**林　征二 （はやし・せいじ）**

**１、プロフィール**

昭和43年青森市に移り住み、永六輔に認められて「話の特集」などに連載。『ヒモ』『ちんぴら』『津軽の女』の著作を残したが、急性肝腎症候群により38歳の若さで急逝した。

＜生没＞

1938（昭和13）年７月15日～1977（昭和52）年６月14日

＜代表作＞

『ヒモ』（大和書房、昭和46年）　『ちんぴら』（大和書房、49年）　『津軽の女』（北の街社、49年）　『林征二の世界』（長部日出雄編、津軽書房、55年）

＜青森との関わり＞

亡くなるまでの９年間、青森市で暮らす。「あかりしび」（北の街社）に連載した「津軽の女」は単行本化された。

**２、作家解説**

小説家、エッセイスト。昭和13年奈良市に生まれる（生前、昭和15年生まれと自称していた）。本名・並川征司。父は新聞記者から革新政党の県会議員になった人物だが、林征二の家庭は妾宅だった。並川は父親の姓で、ペンネームの林は母親の姓である。

県立奈良高校時代からたびたび問題を起こし、立命館大学文学部に入学するも中退。一時、暴力団柳川組の組員であった。組を抜けて昭和40年頃からストリップの世界に入り、踊り子の伴侶（世間でいうヒモ）として旅回りの生活をする。

43年、踊り子のアヤ葉月（本名君子、後に結婚）とともに、青森駅裏にあったストリップ劇場「日江劇場」に草鞋を脱いだ。劇場で働きながら、永六輔のラジオ番組へ手紙を出し続けて、押しかけ弟子となる。永から文章を書くことを勧められ、46年から「話の特集」に「ヒモ」「ちんぴら」を連載。好評を博し、ともに単行本になった。「週刊サンケイ」「宝島」「小説マガジン」などにも執筆している。

いきなりのメジャーデビューであるが、実は小学生の頃から文学少年で、日記や数多くの習作を書き続けてきた土台があった。酒席で乱れることが多かったものの、生来の正義感や人懐こさから中央や青森で多くの知己を得、愛された。青森では、「あかりしび」（北の街社）、「青森NOW」（青森大学）などに執筆。「従軍慰安婦や旅芸人の話を書きたい」と資料を集めていた中、急性肝腎症候群により38歳の若さで急逝した。

特異な経歴で取り上げられがちだが、彼が常に強く心に思っていたのは「差別」の問題であった。没後の55年に出版された『林征二の世界』の編者を務めた長部日出雄はあとがきで、「かれが好んで作品の舞台に選んだ日の当たらぬ場所、見捨てられ、忘れられた場所は、（中略）いっそう日の当たらぬところへ押しこめられ、見捨てられ、忘れ去られていきそうなようすだ。（中略）林征二の書き残したものは、いまますます貴重な価値を持ちつつあるのではないだろうか」と記している。

**３、資料紹介**

〇『ヒモ』

図書

1971（昭和46）年12月15日

190㎜×130㎜

「話の特集」に連載した「ヒモ」シリーズを、大和書房が単行本として出版した林征二の処女作。装丁・イラストは灘本唯人。小池一雄らによって劇画本となったほか、昭和50年、森崎東監督・山城新伍主演で「特出しヒモ天国」（東映）として映画化された。